Osaka University Knowledge Archive

Title	死生観と時間的信念の関連について
Author(s)	高瀬, 明子; 平井, 啓
Citation	大阪大学臨床老年行動学年報. 1999, 4, p. 9-17
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9035
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

死生観と時間的信念の関連について

高瀬明子・平井　啓

はじめに

われわれは、将来に何らかの目標や希望を持ち、その実現に向けて努力している。現在、われわれがどれだけ具体的な目標、あるいは希望を立てているのかは、個々人によって大きく違うと考えられるが、自己の心理学的未来は現在のわれわれの行動を制御して、組織化するような力動的な役割を果たす。しかし近年において、青年期にあたる若者達の自分の人生や将来を無視したような行動が、かつてにもまして増大しているように見受けられる。それは未成年者による少年犯罪が増加の一途を辿り、女子高生による援助交際と名の付く売春行為などが社会問題となっていることからも明らかである。これらの問題に通じるのは、現代青年の倫理観の欠如もあると思われるが、それよりも過去・現在・未来と一つの流れとして続く自己の人生を、継続的、統合的にとらえようとしない態度ではないだろうか。また同時に、自分の生や死についても真剣に考えようとしない態度ではないだろうか。このことより、どのような将来展望、未来展望を獲得しているのかと、どのように生や死について考えているのか、つまりどのような死生観を形成しているのかには何か関連性があると見られるのである。

Lewin (1942) は個人の生活空間の中には、現在だけでなく過去や未来も含まれており、個人の行動の意味を明らかにしようとすれば、過去・現在・未来の力動的な相互作用の中でそれを捉えなければならないと述べた。この力動的な相互作用は、これまでの心理学研究において、時間的展望 (time perspective) という概念のもとに研究されてきた。時間的展望とは、最も一般的な定義によると「ある一定の時点における個人の心理学的過去および未来についての見解の総体」(Lewin, 1951) である。Lewin (1942) が場の理論における生活空間の要素の一つとして、時間的展望を位置付けて以来、時間的展望の構造と意味を明らかにしようと、1950年代の時間的展望と非行、社会階層との関係を明らかにしようとする実証的研究をはじめとして、時間的展望と現実の人間生活の関連性を扱う研究が、今日にいたるまで行われている。それに続いて、年齢やパーソナリティ特性などとの関連が検討されてきた。このようなことから時間的展望は、人間行動を理解する上では重要な概念であると言える。そして近年は、時間的展望と自己との関連性を明らかにする研究が増えている。

今回の調査目的に関連することであるが、人生を有意義に生きるためには、青年期に、リアリティのある時間的展望を獲得することが必要不可欠であると言われている。白井 (1991) によると、時間的展望の獲得とは、より遠くの将来や過去の事象が、現在の行動に影響をおよぼすという時間的展望の広がりが拡大すること、将来に希望を持ち、現在の生活に充実を感じ、過去を受容するという時間的展望の感覚を持つことをいう。都築 (1993) は、青年期においては、自分の将来のことについて、より具体的に、より遠くのことまで

考えたり、見通すことができるようになり、自分自身の生きてきた過去を振り返りつつ、未来の目標の実現に向けて生きていくことが、青年期になって初めて可能であると述べている。

丹下（1995）は「死」に関して、青年期に見られる心的発達はその過程に自己の人生を問い直し、その方針を決定するという作業や他者との関係の調節を含むため、象徴的な意味も含めて、「死」という問題に関係する可能性が大きいと述べた。死は誰にでも間違いなく訪れるものであり、未来の最後に用意された究極的な出来事であると言える。「体験」することは不可能だが、我々は人生を通して、死の意味や死そのものと関わっており、時間的展望と同様に、死は日常的事象であり、一生に関わる問題なのである。

死や生にまつわる価値や目的などに関する考えを「死生観」と呼ぶ。死生観に関しての研究は、丹下（1995）が心的発達と死生観の関係性を明らかにしようとする研究を行っている。その結果、肯定的な死生観を持つ人は、単に、死に対する恐怖の軽減に繋がるといった単純なものではなく、生死に対しても肯定的な姿勢を持つようになるという事が指摘されている。

このことより、どのような死生観を個人が獲得するのかは、時間的展望を獲得するプロセスと関連があるように推測される。それは一つには、時間的展望の獲得も死生観（今回は自発的に展開される死に対する思索から形成される死生観をさす）の形成も、自己の内部での深い思索によってなされることが挙げられる。つまり、豊かで肯定的な死生観を形成している人は、自分の過去・現在・未来を含めた人生を統合した一つの流れであると認識し、未来に希望を持ち、現在の生活に充実を感じ、過去を受容しているのではないだろうか。それは丹下（1995）が、死についての思索を行うことは発達上の一つの通過点であり、生に関する思索活動に対応していると述べている事からも推測できる。二つ目には、先ほども述べたが、「死」は自己の未来の真の終末性を指すものであり、避けることのできない一見不条理な出来事である。しかし死を受容し、そして死までの自分の人生を積極的に生きようとする意識は、時間的展望、特に未来展望の獲得に際し大きな先行要因になっているのではないのだろうか。

以上より本研究では、時間的展望、特に、未来展望とその先行要因としての死生観との関連性を検討することを目的とする。今回の調査では、未来展望を測定するにあたり、時間的信念という概念を用いることにする。時間的信念とは、時間的展望に対する動機づけを含む、個人的価値体系を指す（白井, 1991）。その際に、ポジティブな未来展望を持つためには、肯定的な死生観を持つことが必要であると考えられることから、以下のような予想をたてることにする。それは自発的に展開される死に対する思索の頻度が高くて、また人生に対する目的意識の高い人ほど、現在を重視し、将来のより高い目標の達成のために満足を遅延し、努力する態度である展望主義を信念としているだろう。また反対に死への関心が低く、生に対する目的意識も低く、死を異常に避けている人は将来に対して無関心で、今が楽しければ良いといった態度の刹那主義を信念としているだろうという2点である。また付加的にいくつかの他の要因と死生観、時間的信念の関連性を検討していく。

方　法

1　調査対象

主に近畿圏（大阪府、京都府、兵庫県）の大学生および大学院生197名を調査対象（平均年齢21.1歳）とした。その内、有効回答数は189名（有効回答率95.4%）であり、被調査者の性別は、男性82名（43.4%）で、女性107名（56.6%）である。専攻別では、文系専攻151名（79.9%）、理系専攻38名（20.1%）であった。

2　調査方法

調査には質問紙法を用いた。調査用紙には属性がランダムになるように考慮して配布され、回収は配布者によった行われた。その際、被調査者の匿名性やプライバシーを保護するために無記名式を採用した。

なお、本調査は1998年10月から1998年12月の期間に実施された。

3　調査用紙の内容・構成

(1) 時間的信念について

本調査では、個人の時間的信念傾向を測定する尺度として、白井（1993）が作成した時間的信念尺度（12項目）を用いた。この尺度の信頼性・妥当性は充分確保されている。下位尺度は、現在よりも未来を重視し、現在を将来のための準備期間としている「満足遅延」（3項目）、現在そのものを重視する「現在重視」（3項目）、将来に対する関心やとらわれのなさを示す「将来無関心」（6項目）の3つである。各質問項目に対して、「当てはまる」から「当てはまらない」までの7件法で回答を求めた。

(2) 死生観について

平井・坂口・安部・森川（1998）が作成した死生観尺度（27項目）を用いた。下位尺度は以下の7つである。死の恐怖（4項目）、解放としての死（4項目）、死後の世界観（3項目）、死の関心（4項目）、人生における目的意識（4項目）、寿命・運命観（4項目）、死からの回避（4項目）である。各質問項目に対して、「当てはまる」から「当てはまらない」までの7件法で回答を求めた。

結　果

1　性別・文系／理系の専攻別と死生観との関係

死生観に対して、性別と文理専攻別の2要因による分散分析を行った（Table1）。その結果、「死の恐怖」・「死後の世界観」・「寿命・運命観」において性別の主効果が有意になった（$F(1, 185)=5.98$, $p<.05$; $F(1,185)=7.63$, $p<.01$; $F(1,185)=7.38$, $p<.01$）。また「寿命・運命観」においての交互作用は、$p=.067$となり、有意にはならなかったが、その効果の傾向は十分に示唆された（$F(1, 185)=3.41$, $p>.05$）。これより女性の方が、死を恐れる傾向があり、霊や魂、あるいは死後の世界の存在を信じやすく、また文系女子

学生が、人の生死には何か目には見えない力（運命、神など）が働いていると信じやすい傾向が示唆された。

Table1　死生観における3因子の性別、文理別の平均値と分散分析結果

	性別		文理		性差	文理差	交互作用
	男	女	文系	理系	F値	F値	F値
死の恐怖	13.87	16.25	15.43	14.37	5.98 *	0.00	1.06
	(6.77)	(6.48)	(6.39)	(7.84)	B<G		
死後の世界観	10.28	12.50	11.91	10.05	7.62 **	1.63	0.52
	(4.79)	(4.09)	(4.29)	(5.18)	B<G		
寿命・運命観	12.16	13.89	13.32	12.39	7.38 **	0.00	3.41
	(5.63)	(5.28)	(5.22)	(6.47)	B<G		

（カッコ内は標準偏差）　　*=p<.05，　**=p<.01

2　性別・文系／理系の専攻別と時間的信念の関係

時間的信念に対して、性別と文理専攻別の2要因による分散分析を行った（Table2）。その結果、「現在重視」において文理専攻別の主効果が有意になった（F（1, 185）=5.12, p<.05）。これより、文系学生の方が、現在そのものを重視する傾向があることが見出された。

Table2　時間的信念における現在重視の性別、文理別の平均値と分散分析結果

	性別		文理		性差	文理差	交互作用
	男	女	文系	理系	F値	F値	F値
現在重視	15.73	16.60	16.60	14.74	0.17	0.02 *	0.33
	(3.93)	(3.19)	(3.08)	(4.76)			

（カッコ内は標準偏差）　　*=p<.05

3　死生観と時間的信念との関係

時間的信念を被説明変数、死生観を説明変数とし、重回帰分析を行った（Table3）。その結果、死生観における「人生における目的意識」（p<.01）が「満足遅延」に有意な影響を与えていることが明らかになった。また「解放観」（p<.05）、「死後の世界観」（p<.05）、「人生における目的意識」（p<.01）、「寿命・運命観」（p<.05）が「現在重視」に有意な影響を与えているのが分かった。しかし「将来無関心」においては死生観のどの因

子とも有意な影響が見られなかった。

以上のことから、次のことが言える。人生に対する目的意識が高い人ほど、将来のより高い目標の実現のため満足を遅延し、努力する傾向が見られる。また人生に対する目的意識が高く、死後の世界や魂の存在を信じている人は、現在をしっかり生きる事が将来につながるといった意識を持つ傾向が見られた。そしてその傾向を持つ人は、死を生きることの苦しみからの解放とは捉えておらず、また人の寿命や生死は、運命などでは説明できないという考えを持っている傾向も明らかになった。

Table3　時間的信念と死生観との重回帰分析

被説明変数	説明変数	標準偏回帰係数
満足遅延	人生に対する目的意識	0.271 ***
	解放としての死	-0.112
	死後の世界観	-0.034
	寿命・運命観	-0.008
	死の恐怖	0.03
	死の関心	0.089
	死からの回避	0.169
現在重視	人生に対する目的意識	0.355 ***
	解放としての死	-0.167 *
	死後の世界観	0.182 **
	寿命・運命観	-0.206 *
	死の恐怖	0.080
	死の関心	0.027
	死からの回避	0.092
将来無関心	人生に対する目的意識	-0.019
	解放としての死	0.108
	死後の世界観	0.041
	寿命・運命観	-0.044
	死の恐怖	-0.128
	死の関心	-0.033
	死からの回避	0.132

*=p<.05, **=p<.01, ***=p<.001

考　察

1　死生観と時間的信念との関連性

本研究では死生観と時間的信念の関連性について、重回帰分析によって検討した。その結果、死生観尺度における4因子から、未来展望主義（現在重視・満足遅延）に有意に影響を及ぼしていることが確認された。この結果は、死生観に基づいて時間的信念が確立されるという経路を示唆するものと考えられる。以下に詳細な考察を加えていく。

(1) 現在重視

時間的信念の第2因子「現在重視」には、人生における目的意識因子、死後の世界観因子が正の影響を及ぼし、解放としての死因子、寿命・運命観因子が負の影響を及ぼしていることが明らかになった。その傾向から、自分の人生は自分の力で切り開き、他の何事にも左右されないという意識が強く、また死の意味を比較的肯定的に捉えている人が、現在を何よりも重視し、生きている一瞬、一瞬を大事にしなければならないと考えていることが推測される。Lessing（1972）は、青年期において人生に対する満足度が高い人ほど、現実的な時間的展望を持つと述べている。そして、人生に対する目的意識の項目内容（私は人生の意義、目的、指名を見出す能力が十分にある；私の人生について考えると、今ここにこうして生きている理由がはっきりとしている）などから考えると、この因子得点が高い人は、現在の自分自身を肯定的に捉えており、また過去の人生に満足していることが前提となって、それが現在重視につながっていると思われる。

また「解放としての死」因子が、「現在重視」に負の影響力を与えている傾向には、生と死の捉え方が関係しているものと推測される。それはつまり、死を軽視し、単なる現実生活の苦痛からの「逃避」としてしか捉えていない人は、今生きている現在に対しても無気力な状態になっている。またその反対に、死に様々な肯定的な意味づけを為している人は、人生にどれだけつらく、苦しいことがあっても、毎日を一生懸命生きていくことに価値があると考えているということである。柏木（1996）も生きざまが死にざまを決めるのであり、良き死を死すためには良き生を生きることが大切になると述べている。次に、「死後の世界観」因子が、「現在重視」に正の影響を及ぼしている背景には、間接的ながら、宗教信仰が関係しているのではないかと推測される。日本人の死生観において、宗教が果たす役割は大きいものではないという研究報告が多く為されているが、死後の世界や魂の存在を信じる傾向には、それほど強く宗教を信仰しているわけではないが、それでも精霊崇拝（アミニズム）などが、日本人に深く根付いていることの現れではないだろうか。五木（1998）は目に見えない超現実の世界を想像することは、すでに宗教の根に無意識に触れていることになり、自分の生が大河の一滴にしか過ぎないと痛感することで、人生の歓びに出会うと記している。この様に、死後の世界や魂の存在を信じている人は、同様に自己の存在や、生のはかなさを体で感じている傾向があり、それが現在重視の信念に正の影響を及ぼしている可能性が大きいのである。

しかしその一方で、「寿命・運命観」は「現在重視」に負の影響を及ぼしているのだが、これは先ほどの「死後の世界観」が正の影響を与えている結果とは、一見矛盾するように思われる。何故なら、「死後の世界観」も「寿命・運命観」も目には見えない超現実の世界

を信じているか否かという共通点を持つからである。しかしこの調査は、大学生を対象にしているものであり、青年期に人の生死は運命などで決められていると信じることは、反対に自分の人生は既に決められたものであって、自分がどれだけ努力しても関係ないといった様なネガティブなイメージをもたらすものであり、その結果、現在重視の信念に負の影響力を与えている可能性が高いのである。

(2) 満足遅延

時間的信念の第2因子「満足遅延」には「人生に対する目的意識」因子のみが正の影響を及ぼしていた。人生に対して目的意識の高い人は一般的に、自分の将来に対して長期的な目標を立てている場合が多く、現在の大学生という立場では、獲得することのできない自己実現を将来可能にするために現在はそれに向けて努力してるのではないだろうか。そういう理由で、「今がつらくても将来のためなら我慢するのが人生だ」といった満足遅延信念につながるのではないかと考えられる。この結果は妥当だと考えられるが、一方他の因子と「満足遅延」因子との関連性が見られなかった。この原因には次のようなことが考えられる。それは、満足遅延信念は将来に具体的な目標があるかないかという事が、「死生観」よりも大きく影響を与えていると考えられるからである。いくら肯定的な死生観を獲得していても現在具体的な将来目標を持たないと満足遅延信念にはつながらないと考える。

(3) 将来無関心

時間的信念の第3因子「将来無関心」には死生観のどの因子とも関連性が見られなかった。仮説では「死の関心」因子、「人生に対する目的意識」因子、「死からの回避」因子と関連があるとしていたが、何故この様な結果になってしまったのだろうか。小此木（1982）と福島（1982）は、現代青年は将来が予測できないままなら、できないままに生きるという新しい時間的展望を獲得しており、変動の激しい現代社会に適応するのに有効であるという見解を示している。この事からも示唆されるように、現代社会においての刹那主義的態度とは、未来展望を獲得していないという事には一概に繋がらない。それよりもストレスフルな現代社会からの一種の自己防衛手段ではないと考えられるのである。「将来無関心」信念は、「死生観」という個人内の安定した心理要因というよりも、もっと状況的ないし、表面的な要因（現実生活の中でのトラブルやストレス）に左右されているのではないかと推測される。

2　性別・文理専攻別と時間的信念および死生観の関連性

本研究では性差・文理専攻別と時間的信念および死生観の関連性について検討した。時間的信念に関しては、文系学生の方が現在重視の傾向を持つことが明らかになった。これは理系学生は文系学生よりも将来の道がある程度決定されている事と、理系学生は女性の数が少ないことが原因ではないかと考えられる。それは、現在重視に関連する死生観の因子得点が、女性の方が男性よりも高い結果が得られているからである。次に死生観に関しては、女性の方が「死の恐怖」・「死後の世界観」・「寿命・運命感」の因子得点が高かった。女性の方が死を恐れる傾向があるというのは、Pollak（1980）や丹下（1995）の研究結果と同じくするものである。また女性の方が死後の世界の存在や寿命・運命観を信じやすい

というのは男性の方が一般的に理論的で客観的な性質を持つといわれているので、それが反映した結果ではないだろうか。

3　「死の関心」因子に関して

仮説では「死の関心」因子が時間的信念と関連があるとしていたが、分析結果からは、関連性が見られなかった。これには次のことが考えられる。「死の関心」因子の項目内容（「死とは何だろう」とよく考える、自分の死について考えることがよくある。）より、これは死の思索の深さと言うよりは死の思索の頻度を尋ねているものである。これは一見すると「死」という刺激自体への接近的姿勢と直結しており、精神的不健康さにつながるイメージを被験者側に与えている可能性がある。死の思索の深さを尋ねる項目内容（例えば、死の意味を考えることが人生にとって有意味なことである）なら、時間的信念因子との関連性が見られたかも知れない。

以上のことをまとめると、自分の力で人生を切り開いていこうとする意識が高く、死後の世界を信じているが、死を現実逃避の手段としてはとらえていない人ほど現在重視信念傾向が高くなる。また人生に対する目的意識の高い人ほど、満足遅延信念の傾向が高くなる。しかし刹那主義信念と死生観の関連性は見られなかった。

4　おわりに

本調査において、時間的信念における現在重視信念は、死生観に強く影響されることが明らかになった。一方、満足遅延信念と刹那主義信念は当初の仮説と反して、死生観との関連性がほとんど見られなかった。やはり、肯定的な死生観を形成している人は、自己の存在の重要性や、生命の尊さを肌で感じており、一日一日を大切に生きていこうという意識が高いのであろう。その一方で死生観と刹那主義信念に関連性がなかったことについて、現代青年は自分自身や社会について客観的に見た上で、割り切って刹那主義的態度をとっているのかも知れない。確かに先ほど、変動の激しい現代社会で刹那主義的態度をとることは一概に人生に対してネガティブであるとは言えないと述べた。しかし刹那主義的態度をとり続けることが、次第に人生や生に対して軽視する考えを生み出すことは明らかである。良き死を死すためには良き生を生きることが必要であると柏木（1996）が述べているように、私たちがこれからの人生を豊かなものにしていくためには死の意味を学び、生を尊ばなければならないと考える。

引用、参考文献

平井啓・坂口幸弘・安部幸志・森川優子（1999）死生観尺度作成の試み　未刊行
福島章　1982　幼児化の時代-子供っぽくて、なぜわるい！　光文社
五木寛之　1998　大河の一滴　幻冬舎
柏木哲夫　1996　死にゆく患者の心に聴く　中山書店
小此木啓吾　1982　視界ゼロに生きる-ソフトな自我の効用　TBC ブリタリカ
Lessing,　E.E　1972　Extension of personal future time perspective, age and life

satisfaction of childoren and adlescents. Developmental Psychology, 6, 457-468.
Lewin, K. 1942 Resolving Social Conflict. NewYork; Harper （レヴィン K. 末長俊郎（訳） 1974 社会的葛藤の解決 東京創元社）
Lewin, K 1951 Field Theory and Social Science. NewYork; Harpar（レヴィン K. 猪股佐登留（訳） 1974 社会科学における場の理論 誠信書房）
Pollak, J. M. 1980 Correlates of death anxiety: A review of empirical studies. Omega : Journal of Death and Dying, 10, 97-121.

白井利明 1991 青年期から中年期における時間的展望と時間的信念の関連 心理学研究, 62 (4), 260-263.
白井利明 1993 時間的信念尺度の検討に関する研究 紀要Ⅳ部門 第42巻 第1号 51-57.
杉山成 1995 時間次元における諸自己像から見た時間的展望 心理学研究, 66 (4), 283-287.
杉山成、神田信彦 1996 青年期における一般的統制感と時間的展望 教育心理学研究, 44 (4), 418-424.
丹下智香子 1995 死生観の展開 名古屋大学教育学部紀要, 42, 149-156.
富安弘樹 1997 大学生における進路決定自己効力と時間的展望との関連 教育心理学研究, 45 (3), 329-336.
都築学 1982 時間的展望に関する文献的研究 教育心理学研究, 30 (1), 73-81.
都築学 1993 大学生における自我同一性と時間的展望 教育心理学研究, 41 (1), 40-47.